

「ダメだ。君にできても、私には難しいよ」

「どうして！ どうして諦めるのそこで！ できる！ できるよ！」

私の両肩を掴んで、真正面から五稜郭が檄を飛ばしてくれる。

反面、『まいく』と呼ばれる拡声のからくりを持つ私の手は震えていた。

「ほら、ハチだって応援してくれてるんだよ！ 大丈夫。きっとやり遂げられるよ！」

足元を見ると、愛犬ことハチもきゃんきゃんと鳴きながら私をじっと見つめていた。

さながら「頑張れ」と言われているようだ。

「ハチ……でも五稜郭よ。さっきもだが、私はどうしても『出て』しまうと思うんだ」

「めげないで！ 失敗は成功のモト！ さっきよりは『出て』なかったよ。もう一回！」

「う、ううむ……よし」

パン！ と五稜郭が手を叩く。私は「ふう」と一息吐き出してからもう一度まいくにに向けて声を発する。

「え、ええと……此度はこの番付で、第五位と栄えある賞をありがとう！ こんなめんけえみんなから応援されて私は……さい」

……ああ、また『出て』しまった。

「嬉しいとやっぱり『出ちゃう』のはわかる。でも、ネバーギブアップ！」

「ど、どういう意味かな？」

「諦めないで！」

「なんるほど……応援してくれてよしであ。でも——」

下を向いて首を振る。どうしてもうまくいかない自分が悔しくなった。

「明日の入賞会見で、一切の方言を使わないのは、やっぱり難しいよ」

私と五稜郭が練習していたのはそういう理由だ。

某所で行われた城娘の人気番付にて、私と五稜郭は五位だった。

首里城も同じく五位だったが、彼女は件の会見で司会を務めることになっている。

その会見の練習、進行はこの通り。どうにもうまく行っていない。

「まあ、確かに。千狐ちゃんも変なこと言うよね」

方言だって私たちの良さのひとつ。会見で禁止なんておかしな話なのは間違いない。

「千狐が「この一度だけ、どうかお願いします」と懇願するものだから、私たちとしても無下に蹴るわけにはいかなかった。」

「千狐の言う、誰にでも伝わるようにというのはわかるけど、私には難題だよ」

「秋田城。うん、難しいけど……今回この一度きりだから。やりきろう！」

五稜郭は普段から方言を言うことは少ないからか、緊張もなく上手に話せていた。

きつと、本番でも彼女は大丈夫。けれど、私は感情が高まるとどうしても出てしまう。皆の注目に答えたいが、自分でもうまくできないのが歯がゆい。

しゅんとしていると、五稜郭が何か思いついたようで「あっ」と声を出した。

「ねえねえ秋田城。こういうのはどう？」

「うん？ ハチを抱えてどうするんだい？」

「こうするの！」

五稜郭がハチを自分の顔の前に持ち上げる。

そこから、彼女らしくない裏声を発した。

「みんな！ 私たちを応援してくれて、ホントにありがとだワン」

想像していなかったやり方に私は思わず吹き出してしまった。

「……ぷっ。なるほど腹話術か」

「どう？ 面白いでしょ？」

「語尾を変えちゃいけない決まりはないかな？」

「たぶんね、皆に伝わればいいんだから。どう？ ハチくんも一緒に会見できるよ」

「ふふっ、そうだね。私とハチ、二人で秋田城だ。有難う五稜郭。これならやれそうだ」

「よし、そうと決まれば一緒に練習だ！ 燃えてきた！」

妙案を出してくれた五稜郭と、愛するハチと一緒に再度会見の練習をする。

ハチと一緒にだからか、不思議と言えた。語尾は少し恥ずかしいけれど、これなら大丈夫そうだな。

「じゃあ、秋田城。最後にもう一回！」

五稜郭による「はい！」の掛け声の直後、私は呼吸を整え、まいくに向けて言った。

「こほん、この番付で私と五稜郭、そして首里城の応援……ハチともども感謝の限りだワン。みんな、本当にありがとだワン！ これからも、皆に恥じないように頑張るから一緒に歩んでいこう。最後にひとつ外来語を。んっん……ワンふおーおーる！ おーるふおーワン！」

言い切れた！

その興奮を内に隠しつつ、私はゆっくりハチを床に降ろす。

ハチも私の手ごたえを感じ取ってくれたのか、尻尾を振って立ち、前足を私に委ねてきた。自然に言い切れたのは五稜郭の発想とハチのおかげ。私はかがんでその頭をわしゃわしゃと撫でまわし、五稜郭に向けて親指を立てた。

「ハチー、ありがとうなー！ やったぞ五稜郭、これで大丈夫だ！」

「うんうん！ アツいね、完璧だね！ よーし明日が楽しみになってきた！」

すべてがうまく行った翌日。  
とうとう会見の時が来た。

私の出番は最初。バシッと決めて、次の五稜郭や上位の皆につなげよう。

「……。皆のおかげだワン。じゃあ最後にひとつ外来語を。ワンふぉーおーる。おーるふぉーワン！ 秋田城でした、本当にどうもありがとう！」

練習通り言えて、私の番は無事に終わった。私はハチを降ろして皆に手を振り、礼をする。会場からはわっ！ と歓声が響いた。

皆の前で語尾を変えたのは少し恥ずかしかったけれど、やりきることができた。我ながら良かった……と思う。次は五稜郭の番だ。

「成功に終わったぞ五稜郭よ！ お主のおかげだ。次、頑張……五稜郭？」  
宴の間にあるお立ち台から降り、幕裾で控えている彼女に声をかける。

「お、おかしくなりそう……あんなに練習したのに」

五稜郭はガタガタと震えていた。見るからに異常だ。

私は今にも倒れてしまいそうな彼女を支える。

「あ、秋田城。よ……よかったよ、会見」

「ありがとう……じゃなくて！ いやいやいや、どうしたんだい！？」

「次が自分だと思うと……緊張して、頭の中が真っ白になって、めまいが……」

「待って待って落ち着こう。昨日は全然大丈夫だったろう？」

「あ……あああ……くっそう……私、こんなに本番弱かったかなあ……」

「ほら、吸って吐いて。深呼吸して」

五稜郭の背中をさすりながらどうにか気を静めさせる。

昨日はあれだけ自信満々だったのに、どうしたのか。こんな弱い彼女は初めてだ。

「ええっと。次はー五稜郭ちゃんだねー。はいっ！ どーぞどーぞ！」

会場から司会進行の首里城の声がする。ついに出番がきてしまった。

「大丈夫。大丈夫だ五稜郭。裾で応援してるから。行っておいで！」

「う、うううううん。い……行ってくりゅ！」

囁んだな……私まで緊張してきたじゃないか。

手の動きと足の動きを同じにしてがくがくとからくりのように動いてお立ち台に立った

五稜郭。

「こくおーと会場みんなー！ ということด้วย。五稜郭ちゃんだよー」

「ぼ、ボンジュール！ ご、五稜郭ですっ！」

ふらんす語……はいいのか千狐よ。方言はナシの話だったが。緊張しすぎたぞ五稜郭。

「今回の番付でえ。スイと秋田城ちゃんと五稜郭ちゃんが五位だったんだよ。今の気持ち

はどうかなあ？」

「え、えーとね！ みんなありがとうね！ なまら嬉しい！」

「ちよっ！」

裾で思わず声が漏れてしまった。それは北海道弁だ五稜郭！

『……………』

いたたまれない空気が会場を包んだ。痛い沈黙。

先の言葉がなんとなく方言なのは察されているし、方言禁止という決まりは多分会場の皆も知っている。

そんな中、顔をはっと上げた五稜郭が周りをきよろきよろしながら焦ったように「ええと……………」と言いつつ続けた。

「ま、まあそだねー。こう、上位陣に私が入ったつてのもこそばい話なんだよ。なして？ つて。初めてここに来た時はそりゃもうみったくない奴だったからさ私……………総裁に申し訳ないべや、みたいな。でもその時なんもだよ、つて総裁が笑ってくれたんだー！」

あ、あやつ！

開き直って北海道弁を乱発しだしたぞ！？

取り繕うように笑っておるが……………規則無用か。なんて城娘だ……………道理を蹴っ飛ばすとは。

「――したっけ、私の話は終わり。ああー身体がこわい……………どうもねー！」

『……………』

終わっても会場の痛い沈黙は続く。私は右手で額を押さえた。

「えー。うん。五稜郭ちゃん。ありがとうねー！ じゃ、じゃあ次の四位の城娘だよー！」

どうにか進行に戻した首里城。うん、厳しかっただろうけど、よく進めたね。

ははは、と照れ笑いなのかなんなのか、そんな顔をしつつも首里城に背中を押されて半ば無理やりお立ち台を去った五稜郭。そして戻って来るなり、私に駆け寄って来た。

「どう！ 良かったでしょ!？」

「いいわけあるかあ！ おめ、わりごだな!!」

「痛ったあ!？」

五稜郭がこんなにもあがり症とは思わなかった。

五稜郭に強烈な平手が炸裂したところで、四位の子の会見が始まる。

私たちのこの後は……………反省会だ。